

〔研究ノート〕

## エルトン・メイヨーとピエール・ジャネ その6

—メイヨーの心理学への関心—

高木直人

名古屋学院大学商学部

### 要 旨

メイヨーが心理学を取り入れた産業調査としてホーソン実験が一般的には有名であるが、すでに、心理学を取り入れた産業調査をフィラデルフィアのコンチネンタル・ミルズ社の紡績工場（ミュール紡績部門）で実施している。そこで、職場環境と離職率に関する調査および、その問題に対する施策を行っている。それは、メイヨーがアメリカに渡るまでに、心理学に関する知識と心理療法をすでにオーストラリア時代に確立していたと考えられる。

本稿では、メイヨーが心理学に関心を持った理由と、社会組織と多重人格の関連性をいかに学際的アプローチで解明に試みたのかを探ってみた。

キーワード：哲学，心理学，社会学，文化人類学

## Elton Mayo and Pierre Janet (VI)

—Mayo's interest in psych—

Naohito TAKAGI

Faculty of Commerce  
Nagoya Gakuin University

## 緒言

メイヨーの人間関係論は、ひとり経営学の問題だけでなく、隣接の社会科学分野である、哲学、心理学、社会学、文化人類学と経済学を取り入れ、それらと広くかつ深く関係させながら、学際的アプローチを進展させている。その意味においても、経営学の発展過程でメイヨーの業績は重要と考えられる。しかし、メイヨーのアメリカで実施した産業調査の本当の意味はあまり理解されていないようにも考えられる。

メイヨーは、人間関係論を研究するために学際的アプローチを取り入れたのであろう。メイヨーが、学際的アプローチを取り入れている本当の理由は、人間関係論こそ社会組織と多重人格の関係でできあがっていることに確信を持ちたかったのだと筆者は考える。

本稿ではまず、メイヨーの人となりから、彼が産業文明に対する基本的問題に関心を持った理由を考察する。そして、メイヨーがジャンネの心理学に関心を持ったきっかけを探ってみた。

## I. メイヨーと産業文明

メイヨーと心理学の関係を考察する前に、メイヨーがオーストラリア時代に、産業文明に対する基本的問題に関心を持つこととなった理由をまず考察してみた。

その手がかりは、トラヘアーの著書『ヒューマニスト気質 (Humanist Temper)』<sup>1)</sup>に、「メイヨーは、1900年まで家族と南オーストラリアで過ごしていた。メイヨーの若いころ、南オーストラリアは経済的、政治的、社会的変化をこうむり、それらの変化がメイヨーに大きな影響をあたえた。後年、メイヨーは、著書の多くに、その例証を参考に用いている<sup>2)</sup>と書かれている。

さらに、メイヨーの幼年期の1880年から1900年当時の南オーストラリアの政治、経済、労働状況に関しても、「南オーストラリアはウールと麦を生産し、銅を採取するという、典型的な農村型の産業に依存していた。メイヨーの幼年時代、田舎で生活していた人々が、アデレードに移り住むようになった。アデレードという都市には、田舎では望めない生活があった。さらに都市としてのアデレードには、仕事があり、お金持ちになるチャンスがあり、田舎では考えることのできない快適な生活があった。また、年寄りには福祉サービスや医療サービスの提供が行われていた。その当時の田舎では、小学校を越えたレベルの教育は受けられなかった。少しレベルの高い教育（中学校での教育）を受けたいものは、教育を受けるためにアデレードにやって来ていた。人口移動統計の進歩により1900年には、南オーストラリアの人口の45%がアデレードに住んでいるという事実が判明している。その事実に基づき、新聞、役人等は、田舎から都会への人口移動を抑える政策として、農村の産業に科学技術（最新の農工機械等）を導入すれば、田舎に住む人々の生活は快適になる、というようなアピールをしていた<sup>3)</sup>と詳しく書かれている。

また、「メイヨーは若いころ、南オーストラリアアデレードの都市化の問題やその問題を解決するための科学技術の導入を支持する議論に身をさらしていた<sup>4)</sup>と書かれており、メイヨーは若いころから都市化の問題とその解決策に関心を持っていたと考えられる。

さらに、「メイヨーの幼年期のオーストラリアは、恐慌にさいなまれており、賃貸料の高騰、賃金の低下、労働市場は隣接するビクトリアからの移民で膨れ上がっていた。過酷な労働はどこでも見られた。そのときの南オーストラリアのアデレードでは、景気の悪さゆえに、ギャンブル場や売春婦が現われることにより、人々の生活は脅かされていた。メイヨーが青年になるにつれて、南オーストラリアの政治と経済は、向上しだしていった<sup>5)</sup>」というようなことも書かれているように、このような時代を生きたメイヨーにとっては、産業文明の問題にかなりの関心を持っていたと考えても一定の合理性はあると思われる。

メイヨーは、「自分自身をアデレードの名士であると考えていた<sup>6)</sup>」との記載もある。さらに、「メイヨーの産業文明の政治的問題に対する揺るぎがたい方法は、南オーストラリアの政治的経済的变化によってつちかわれたのである<sup>7)</sup>」と結ばれている。まさしく、この時代こそメイヨーが産業文明に関心を持たせることになっていたと言っても間違いのないであろう。

この時代を生きたメイヨーは、お爺さんのメイヨー博士がアデレードで築いた地位と、その地位に相応しい優雅な生活（ビクトリア王朝時代のような生活）の中で育っている。だから、メイヨーも、お爺さんの影響（知的な意識の持ち方）をかなり受け継いでいたと考えられる。

このような点からみて、メイヨーは、幼少期からオーストラリアの政治や経済に関心を持っていたものと思われる。だからこそ、メイヨーの産業文明に対する基本的問題への芽生えは、大学に入学する以前からあったと考えられる。

## II. メイヨーと学問の出会い

メイヨーは、父のジョージが出資してくれた、2つの会社の経営に参加していたころ、ビジネスライフの不满について、いろいろな人と議論をしている。その中でも、姉の紹介でアデレード大学の教授の一人であったウィリアム・ミッチェル（以下はミッチェル）と、ビジネスライフの不满について議論している。メイヨーが質問した問題に対し適確に答えられたのは、当時唯一、ミッチェルだけであったようである。

その議論をきっかけに、メイヨーは、アデレード大学で、ミッチェルの指導のもとに哲学、心理学と社会学の勉強をやり直そうと決意し、大学に再入学している。この大学への再入学こそが、メイヨーの学際的アプローチを築きあげることができた重要な部分であろう。なぜなら、メイヨーは人間関係論で最も理解しておかなければならないと考えていた、社会組織と多重人格の問題を解明する方法として、この学際的アプローチを築きあげたと考えられるからである。

メイヨーは、アデレード大学で、ミッチェルの指導のもとに哲学の勉強を学部からやり直している。ここで、哲学を本格的に始めたことに大きな意義があったのであろう。メイヨーが再入学して、ミッチェルの指導を希望したことは、単に、ビジネスライフの質問に適確に答えられた理由意外にも、ミッチェルという人物がかなり優秀な人物で、幅広い知識を身につけていた人材であったからと考えることができる。では、メイヨーが指導を希望したミッチェルという人物について、ここで簡単な説明しておくこととする。

ミッチェルは、アデレード大学で、精神哲学、道徳哲学、動物学、解剖学、心理学、政治学、論理学、教育の倫理と実践、英語と文学などを研究し教えていた人物である。また、ミッチェルは、本来なら心理学者であるが、アデレード大学においては、「英語と文学そして、精神哲学と道徳哲学の教授」<sup>8)</sup>として在職している。

すなわち、ミッチェルの研究領域は幅広く、また、大変優れた研究者であったことが伺える。このように、広範囲に研究していたミッチェルに出会っていることが、メイヨーの研究領域が学際であることを意味している。だから、メイヨーは、ビジネスライフの不满について議論をいろいろな人で行い、幅広く学問を学べる指導者を探しているときに、ミッチェルに出会うことができのだと考えられる。

では、メイヨーは、ミッチェルの指導のもとで、アデレード大学時代どのような研究を行っていたのであろうか。

アデレード大学に入学した最初の年にメイヨーは、ミッチェルが担当する経済学、論理学、心理学、哲学の講義を受講しているようである。

当時の経済学の講義では、政治経済学原論、銀行と商業、英国産業史概論に関する講義を受けているようである。また、論理学の講義については、ジェヴォンズの論理学の基本原則を用いて、独学でボーザンキットの論理学の本質を学んでいるようである。

そして、メイヨーは、本格的にミッチェルから心理学を学ぶこととなる。心理学の講義は、ミッチェル自身の著書である『精神の構造と成長』<sup>9)</sup>をもとに授業されていたとの記録がある。この『精神の構造と成長』とい本は、メイヨーの知的成長（心理学に関する知識の蓄積）に重要な役割を果たしたと考えられる。

『精神の構造と成長』とい本は、身体と精神の問題、科学的な心理学、経験の説明と分析に関する内容が含まれていたようである。特に、『精神の構造と成長』とい本は、模倣、仲間意識、美的情緒に関する議論の中で社会関係の心理学の説明もミッチェル考慮していたものらしい。その概要は、複雑な精練と感覚の向上そして知覚経験をとおしていかに知性が発達するか、そして心理学における科学的説明の位置付けを確認しようとしたものであったらしい。

メイヨーは、『精神の構造と成長』とい本をもとに、心理学者であったミッチェルから、心理学を本格的に学んでいたと考えられる。おそらく、ここでの学びが、メイヨーがジャンの心理学に関心を持つことになった理由の一つと言っても過言ではない。

特に、メイヨーの心理学に関する知識は、アデレード大学の学生時代から、その実力は特筆すべきものがあつたようである。さらに、ミッチェルが教えていた心理学では、ハクシリーとマクドゥーガルのテキストを参考にした、生理学的心理学の要素に重点が置かれていた講義のようで、この心理学の講義をメイヨーが理解するために医学的知識（エジンバラ大学とアデレード大学の医学部を中退している）が役立っていたのであろうとも考えられる。

また、哲学の講義では、シュペレグラ哲学の歴史とロイスの個人的世界を中心に授業が進められていた。徳の認識論の歴史に言及する際には、ロック、バークレイ、ヒューム、そしてカントの哲学思想に依頼していた。これらの哲学思想は後に、メイヨーが研究対象としての心理学と医療対象とし

ての心理学とを区別する際の助けとなったものと考えられる。

ミッチェルは、英国の哲学に加え、ギリシャ哲学の知識を得るために初期の哲学をメイヨーに紹介している。メイヨーは、哲学コースにおいてミッチェルの指導のもとにカントを読み、「社会進化の基準」の命題に精通したとされている。ミッチェルによってメイヨーは、哲学に関しても高度な知識を学んでいたであろう。

また、メイヨーは、フランス語の講義も受けていた。授業の内容は、メイヨーに向いていないものようであったようだが、後のジャネに関する研究、精神病理学の調査研究（精神医学はフランスで一番盛んに研究されている）にとって重要なものとなったようである。

このようにメイヨーは、アデレード大学に再入学し、ミッチェルの指導のもとに研究領域の幅が広まり、また、大変優れた研究者と育っていったのである。

### III. 研究者への道

ある日、新設のクイーンズランド大学の理事会から、ミッチェルに、論理学、心理学、倫理学の講義が担当できる教員を紹介して欲しいという依頼があった。ミッチェルは、そのときに迷わず、メイヨーを紹介したようである。

ミッチェルは理事会に、メイヨーを推薦する手紙を送っている。その手紙の中で、ミッチェルは「私が大学教授として15年間指導してきた学生の中で、エルトン・メイヨーは大変優秀な学生である」<sup>10)</sup>と書いている。ミッチェルは、メイヨーが優れた教師になり、大学の内外で哲学研究を大いに促進してくれるものと確信していたと思われる。

こうしてメイヨーは、最初の研究的地位を、1911年4月ブリスベンのクイーンズランド大学で得ることになる。では、メイヨーは、クイーンズランド大学時代、どのような研究活動を送っていたのかを簡単にまとめてみた。

メイヨーは、クイーンズランド大学で、論理学、心理学、形而上学、倫理学の概論の講義を担当するという話で教員になっている。しかし、1912年には、大学の事情により、経済学と教育学の講義も担当している。メイヨーは、現在では考えることができないほど、広い範囲の学問を教えていたことになる。

だからメイヨーのクイーンズランド大学での講義は、広い範囲を網羅していた。組織経済学では、市場を定義する問題を考え、貨幣供給の変化では、グレンシャムの法則の応用や富と預金残高と銀行家の役割関係の問題を教え、マルサスの人口論、保護貿易関税、オーストラリアの賃金委員会では経済効果についての講義も行っていた。

さらに、論理学に関する二講座では、演繹法の正当性、科学的分類、三段論法の原理、因果関係、ミルの方法、仮設を使う心理学についての講義も行っていた。

そして、心理学に関する二講座では、概念連合説、ロック、ヒューム、フェヒナーの法則、カント、思想に関するミッチェル、意識に関するボーゼンキッ、感情に関するマクドゥーガル及びジェイムズ、シェ、リングトンの実験、認識論の研究における心理学の役割についての講義も行っていた。

論理学および形而上学では、学生たちにソクラテス、アリストテレス、スピノザ、ルソー、デカルトの考え並びにそれらの考えに批評家であるロイス、セス、ポーザンキットを紹介した講義も行っていった。論題には、快楽論、概念論、経験主義論、詭弁法、慣行、感情が含まれていたようである。

またメイヨーは、そのころ、文化人類学のマリノフスキーと知り合い、かなりの親交を深めている。そしてこの関係から、文化人類学とそれが具体的に研究対象としている未開社会に関する知識を得ることになる。それはまた、トラヘアーが「最も見返りの多かった友人関係」<sup>11)</sup>と言っているように、メイヨーのその後の思想に大きな影響をあたえることになる。マリノフスキーが研究していた未開社会は、一つの協働体系を形成しており、人々は、そこでは自発的な活動をおこなっていたのであった。メイヨーは、そこに一つの社会の理想型をみていたと言っただけであろう。

メイヨーにとっては、マリノフスキーが研究していた未開社会が示している、一つの協働体系を形成している理由と人々の自発的な活動などを、ジャネの心理学と関連させ、社会組織と多重人格との関係に関心を持つきっかけが、ここにあると感ぜられる。

#### IV. メイヨーと心理学

今までの考察から、実際にメイヨーが最も力を入れて研究していたのは、心理学だと思われる。特にメイヨーは、精神医学に傾注していた。実際には、神医学の著書を、ジャネ、フロイト、ユング、アドラーを中心に読んでいた。それらの研究成果は、メイヨーの第一次大戦末期に、クイーンズランド大学の仕事とは別に、マターソンとの共同研究により、「shell shock (弾丸衝撃)」<sup>12)</sup>に陥った兵隊の「精神医学治療プログラム (a psychiatric treatment program)」を企画実施し、大きな成果を上げたことから言える。

「shell shock (弾丸衝撃)」は一種のヒステリー系の症状で、戦争が精神におよぼす累加的緊張によって起こる自制力・記憶力・発言能力・視覚などの喪失症である。このような状況に陥る原因が、研究初期の段階で、身近なところで爆発した爆弾によって起こると考えられていたところから、「shell shock (弾丸衝撃)」と名づけられていた。

精神医学治療法とは、暗示や催眠術などの精神的方法による治療法である。メイヨーは、この方法をオーストラリアで最初に行った人物である。このときから、メイヨーは、精神医学者の道を歩み始めるのである。

メイヨーは、この「shell shock (弾丸衝撃)」の精神医学治療法を研究しているときに、正常な人間が、どうしたらよいかわからないような未知の環境に対応しなければならないといった心理的問題に直面するのは、戦場においてだけでないことを知っていた。メイヨー自身が体験してきた近代産業社会への個人適応の場合もそうであったように、こうした問題が今日の産業文明の社会的・道徳的病弊の多くのものの根源をなしている原因であると考えたのである。

メイヨーは、このときの研究と経験をいかし、広く産業における人々の「環境不適応 (maladjustment)」の問題に関心を向けて取り組んで行くことになる。その問題を解明するために、メイヨーは、精神医学者の著書の中でも特に、ジャネの理論(考え)に関心を持つことになる。それ

は、後のアメリカで行われた、最初の研究やホーソン実験の面接計画からもうかがえる。さらに、ホーソン実験での継電器組立作業実験の結果から、ジャネの心理学を用いた、面接計画を実施したとも考えることができる。

メイヨーの研究に対する姿勢を考えると、社会科学分野に関する著書も、アデレード大学の学生時代とクイーンズランド大学の教員時代に多数読んでいたと考えられる。その中で、フランスの社会学者であるデュルケムの考えたアノミー理論は、メイヨーにとってはジャネの理論と同じ現象を問題にしているように思えたのではないであろうか。

メイヨーにとって、デュルケムは「社会学者」の立場からの研究者として、ジャネは「心理学（精神医学者）」の立場からの研究者として、マリノフスキーは「文化人類学者」の立場からの研究者として重要な人物であった。

すでにこのときに、メイヨーは、デュルケムのアノミー理論とジャネの強迫観念を利用して、職場の人間関係論を解明できるのではないかと考えていた。この職場の人間関係論こそ、社会組織と多重人格の問題であったとも考えられる。

## V. メイヨーとジャネ、デュルケム

メイヨーは、広く産業における人々の「環境不適応 (maladjustment)」の問題に関心を向けて取り組んでいた。その問題を解明するために、メイヨーは、精神医学者の著書の中でも特に、ジャネの理論（考え）に関心を持っていた。では、そのジャネの理論に、なぜ、関心を持ったのかについて少しここでみている。

ジャネは、精神病理学のフランス学派の創始者であり、強迫概念的思考に関する研究者であった。ジャネが、強迫症と呼んでいる病気は、精神神経症の一種であり、これだけであれば、ヒステリーや精神異常と違って、器質的な併発症をともなうこともなく、再教育や心理的分析によって治療することができる。また、現実にある程度の年齢になれば多くの場合それは落ち着いていく。

ジャネは、この病気の主な特性が、患者がある固定観念にとりつかれており、たとえその観念は不合理であり虚偽であると思っても、それが先入主となって強圧的な力を振うように患者には思われるところにあるとしている。こうした特性は、われわれ普通の人にもしばしば現れるとしている。

たとえば、過度のプレッシャーやストレスがかかったとき、友人と喧嘩をしたとき、あるいは大きな失恋をしたとき、そうしたときに人は、一つのことしか考えられなくなり、特定のことを忘れようとしても忘れられないようなことがよく起こることが、すなわち、強迫概念であると言っている。

こうした状況を少し考えてみると、その背後で人は、しばしば物事に一つの色づけをしている。好きか嫌い、良いか悪いか、安全か危険か、参加するか参加しないかなどがそれである。この場合人は、それらのどちらか一方の立場に立ち、物事を考えているのである。

たとえば、相手が嫌いだと思えば、その人の親切から出た行為であったとしても、敵対的行為にみえてくるものである。こうしたことから、これらの人々は、現実を適切に認識することができなくなってしまう。認識が適切でなければ、そこから導き出されてくる行為も、不適切なものとなる。

つまり人は、社会的状況に対して適切に反応することができないのである。一般に、対人恐怖症などがその例として考えられる。しかし、重要なことは、先にも見たように、こうした現象はわれわれ普通の人でもしばしば示していると言うことである。すこし、職場という観点から見つめなおしてみると、この状況は、社会組織と多重人格の問題にも似ているように思える。

また、デュルケムの立場から現代社会を考えてきたメイヨーは、デュルケムの提示したアノミーの状況と、ジャネの問題にした強迫概念に悩む人々を見てきている。自分の置かれている状況を適切に把握できなく、仕事が手につかない状況がその一例なのである。それは、落ち着きがなく動き回るかと思えば、あるいは逆に、無気力になってしまうなど、いずれにしても、中庸がないのである。

ここで、アノミー状況にある人々は無規制な思考をすとした。しかし、多くの場合その思考には、強迫症的色彩がともなっているのではないかと言える。それは、ちょっとしたことにつまずき、物事を悪く考え、些細なことを最悪な事件にしてしまい、最終的には自殺にいたる状況を生み出すのである。メイヨーは、自殺者のほとんどは強迫症的だとしている。そして、現代の産業都市における自由な生活は、知らず知らずのうちにわれわれを強迫的にしているのである。

メイヨーは、デュルケムの提示したアノミーの研究とジャネの強迫症の研究、そして実際に行ってきた心理療法の経験から、当時のジャネの関心が高かった解離の問題こそが、社会組織と多重人格の問題に大きなかかわりをもたらしていると感じたのではないかと思われる。

## 結言

本稿では、メイヨーのオーストラリア時代（アデレード大学の学生時代とクイーンズランド大学の教員時代を中心にして）の研究活動を中心に考察した。このことにより、メイヨーの産業における人間関係論への関心と、それを解明する基礎知識としてのジャネの心理学は、オーストラリア時代にすでに形成されていたことがわかる。

また、メイヨーは、オーストラリアのクイーンズランド大学の教員時代に、少なくとも3冊の著書を公に発表している。

メイヨーは、その著書の一冊である、『民主主義と自由（Democracy and Freedom）』<sup>13)</sup>で、20世紀の産業社会における労使の対立闘争の解決方法をすでに把握していたと考えられる。それは、「社会学観点から見れば、社会は職業的集団に組織化された個人によって形成されており、その各々の集団はその社会のある機能を遂行しているのである。個人は、彼の仕事が社会的に必要なものであると働きながら感じる事が可能でなければならない。それ故に、個人は彼の集団を超えて社会を見ることができなければならない。そのためには、すべての社会階級を共通の利益と目的を持った共同社会の下に包摂するような社会状態を実現しなければならない」<sup>14)</sup>と言っている。

すなわちメイヨーは、社会の全体が認識できて、そこでの自分の役割を理解し、社会に自発的に貢献することによって、社会は統一されねばならないと考えていたのである。社会に自発的に貢献することとは、ある組織に所属し、ある目標を達成させる自分があるとも言える。それこそが、社会組織と多重人格の考え方が生まれたきっかけであろう。

本稿の考察において、心理学を中心にメイヨーが最後に書き上げた著書である「ピエール・ジャネの心理学に関する研究ノート (Some Notes on the Psychology of Pierre Jane)」<sup>15)</sup>が、彼にとって重要である意味が少し解明されたように思われる。

## 註

- 1) Trahair.Richard.C.S, “*The Humanist Temper: The Life and Work of Elton mayo*”, Transaction, Inc., 1984.  
本稿においては、トラヘアーの著書『ヒューマニスト気質 (Humanist Temper)』を参考に、メイヨーの人物となりを考察している。メイヨーのアデレード大学時代とクイーンズランド大学時代に関する記載の部分はこの本を利用し作成している。
- 2) *ibid.*, pp.25-33.
- 3) 4) *ibid.*, p.27.
- 5) *ibid.*, pp.27-28.
- 6) 7) *ibid.*, p.28.
- 8) *ibid.*, p.53.
- 9) *ibid.*, p.53.に、1907年に、ミッチェルの書いた著書、『精神の構造と成長 (*Structure and Growth of the Mind*)』が公開されているとある。
- 10) *ibid.*, p.59.
- 11) *ibid.*, p.83.
- 12) 「shell shock (弾丸衝撃)」とは、第一次世界大戦中は、心的外傷後ストレス症候群 (Post traumatic stress disorder) である。現在は、心的外傷後ストレス症候群 (Post traumatic stress disorder) と呼ばれている。また、「shell shock (弾丸衝撃)」は、第二次世界大戦中は、戦争神経症と呼ばれていた。
- 13) Mayo, G. E. *Democracy and Freedom: An Essay in Social Logic*, Melbourne, The Macmillan & Co., 1919.
- 14) *ibid.*, pp.37.
- 15) Mayo, G. E, “*Some Notes on the Psychology of Pierre Janet*”, Boston, Harvard Business School, 1948.

## 参考文献

- P. ジャネ著、関計夫訳『人格の心理的発達』東京、慶応通信、1955年。  
山本安次郎・田杉鏡・飯野春樹訳『新訳 経営者の役割』ダイヤモンド社、1968年。  
桜井信行著『新版人間関係と経営者』経林書房、1971年。  
進藤勝美『ホーソン・リサーチと人間関係論』産業能率短期大学出版部、1978年。  
E. デュルケム著、宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波文庫、1978。  
飯野春樹編『バーナード 経営者の役割』有斐閣新書、1979年。  
E. デュルケム著、宮島喬訳「自殺論」『デュルケム ジンメル』中央公論社、1980。  
P. ジャネ著、松本雅彦訳『心理学的医学』みすず書房、1981年。  
石川文康著『カント入門』ちくま新書、1995年。  
大橋昭一・竹林浩志編著『ホーソン実験の研究』同文館出版、2008年。  
榎原清則『日経文庫 経営学入門〔上〕第2版』日本経済新聞出版社、2013年。

竹田青嗣著『プラトン入門』ちくま学芸文庫，2015年。

Barnard, C. I., *The Functions of the Executive*, Harvard Univ. Press, 1938.

F. J. Roethlisberger and William J. Dickson, *Management and the Worker*, 1939.

Richard Gillespie, *Manufacturing knowledge — A history of the Hawthorne experiments*, Cambridge University Press, 1991.